

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	蘇米雅
論文題目	中国・内モンゴルにおける環境保護政策と住民自治システム形成に関する実践研究		
(論文内容の要旨)			
本論文は、中国・内モンゴルにおいて砂漠化防止のために実施された生態移民政策によって強制移住させられ、崩壊の危機に瀕した牧民コミュニティを再生する運動を、筆者自らが中心メンバーとして展開しつつ、その実践の軌跡を記述するとともに理論的に考察したものである。具体的には、①内モンゴル自治区正藍旗バインオーラ村から約 30 キロ離れた地に強制移住（2002 年）させられた 191 世帯、586 人が住む移民村（B 移民村）において、貧困からの脱却と住民の絆の再生を目的に開始された運動（2005－08 年）、②予想もしなかった 2 回目の移住（2008 年）によって崩壊しかけたコミュニティを、バインオーラの草原への回帰を軸に何とか維持しようとする運動（2008 年－11 年）が報告されている。バインオーラ村は、筆者の故郷であり、現在も筆者の家族は B 移民村に居住している。 本論文の第 1 章（序論）では、本研究の目的と研究現場を述べるとともに、研究の背景として、内モンゴル牧畜地域の生活様式と、その歴史的変遷についても紹介している。 第 2 章では、B 移民村のコミュニティ再生を筆者が決意する契機となった別の移民村（オリック村から、2001 年に強制移住させられた 115 世帯、436 人の移民村：オリック移民村）で開始された能動的な運動に関する研究が報告されている。オリック移民村でも、B 移民村と同様、数 10 頭のモンゴル牛を草原で放牧していた移住前の生業から、高価なホルスタイン牛 1－3 頭を畜舎で飼育する生業へと変更することが強いられた。また、移住前の半ば自給自足の生活は、金銭なしには何も入手できない貨幣経済の生活へと変化し、コミュニティの絆も弱体化した。そのような状況において、オリック移民村の住民の中に、「本来の生活」を取り戻そうとする能動的な運動、すなわち、違法行為を覚悟の上で、移住前の草原にホルスタイン牛を連れて行って放牧する再放牧運動が始まった。その運動は、「長い間眠っていたものが呼び覚まされること」を意味するモンゴル語「スルゲフ」で呼ばれていた。また、その「スルゲフ」は、運動参加者によって創出された新しい生産方式によって支えられていた。 第 3 章では、B 移民村で筆者が開始した運動について述べている。B 移民村の住民は、生活苦に加えて、ホルスタイン牛購入の借金返済に迫われ、ゴミ拾いで何とか生きのびる日々を送っていた。また、かつてのコミュニティ内の互助は弱体化し、行政依存の無気力な態度が染みついてた。筆者は、オリック村で目の当たりにした創造的な「スルゲフ」を B 移民村住民に紹介し、生活改善のための能動的な運動に立ち上がろうと訴えた。それに対して、多くの住民は概して無反応だったが、5 人の若者が筆者と行動を共にする決意を固めた。彼らと筆者は、政府指定の牛乳集荷業者の支配を脱すべく、住民主体の牛乳ステーションを設立し、次第に多			

くの住民を結集していった。また、テレビやラジオの番組で自らの運動を発信したり、大学生の実習教育の現場として大学生の受け入れも行った。

第4章では、予想もしなかった2回目の強制移住について述べ、それによって地理的にも分断され、崩壊寸前に追い込まれたコミュニティを何とか維持しようとする運動を紹介している。1回目の強制移住が行われた当時、市の郊外にあったB移民村は、その後の都市開発によって市の中心部になってしまい、ホルスタイン牛の飼育には不向きになってしまった。そのため、政府は再度の強制移住という異例の措置を講じた。2回目の強制移住では、①B移民村に残る（ただし、牛の飼育はやめる）、②新たに設置された移民村に移住する、③親戚・知人を頼って②以外の地に転出する、という選択肢が提示され、コミュニティは地理的にも解体の危機に瀕した。このような事態に対して、一人の若者と筆者は、何とかコミュニティの絆を維持できないものかと、バラバラになった元・B移民村住民一人一人を訪ね、その思いを聞いて回った。その結果、彼らの多くから、「ウブルジェ」を取り戻したいという声が聞かれた。「ウブルジェ」とは、かつての遊牧時代に毎年、冬になると戻ってきた「冬の営地」を指していたが、定住放牧時代になってからは、その地が定住の地となった。つまり、元・B移民村住民にとっての「ウブルジェ」とは、強制移住以前の村（バインオーラ村）、とりわけ、その草原を意味していた。これを知った筆者と若者は、元住民が一堂に会する会合を開き、「ウブルジェ」の自主管理を主たる目的とする協会を設立し、バインオーラ村の近隣村や行政組織をも巻き込んだ新しい草原管理体制を構築していった。

本論文では、第3-4章の実践を、規範理論の立場から解釈し、自らの実践を自省する指針にしている。具体的には、第3章の実践を「無気力な行政依存を脱し、能動的にコミュニティを再建する」規範の形成と、その外部への伝達（筆者の身体を媒体とする伝達）として位置づけている。また、第4章の実践を、同様の規範を、言葉（ウブルジェという言葉）を媒体として伝達するプロセスとして位置づけている。

(論文審査の結果の概要)

本論文は、中国の強大な国家権力を背景に実施された生態移民政策に翻弄されながらも、何とかコミュニティの絆を維持するために、筆者が中心になって展開した運動を、まさに中心的当事者の立場からメッセージ化し、理論的な考察をも行ったアクションリサーチ（実践研究）をまとめた力作である。その文章は、抗しがたい強大な権力によって伝統的なコミュニティの地を奪われた牧民の惨状、その惨状を何とか打開したいと願う筆者と若者グループの挑戦、その挑戦の成果をも呵責なく押しつづす再度の苦難、その苦難を克服する唯一の道として浮上した原点（強制移住以前の村の草原）への回帰、という一連のプロセスを当事者ならではの筆致でリアルに描写しており、読者を追体験させるに十分な迫力をもっている。この追体験性は、研究者と当事者の協同的实践を旨とするグループ・ダイナミックスのエスノグラフィにとって極めて重要な要素である。

以下、本論文の章立てを追って評価を述べる。

研究目的と研究現場を述べた第1章（序論）に続いて、第2章では、筆者が自らの故郷、バインオーラ村から強制移住させられた人々が住むB移民村での運動を決意するきっかけとなった、別の移民村（オリック移民村）住民による能動的な運動に関する現場研究の成果が報告されている。すなわち、B移民村よりも1年前に強制移住させられ、B移民村と同じく経済的困窮とコミュニティ崩壊に直面していたオリック移民村の住民の中に始まった再放牧運動が、「スルゲフ」というモンゴル語をキーワードに論じられている。後に第4章で登場する「ウブルジェ」という言葉もそうであるが、一連の運動で筆者や住民たちを突き動かした言葉がクローズアップされている点は、言語による現実の構成を重視する社会構成主義の観点からも極めて興味深い。また、「スルゲフ」が単なる「旧さ」の回復ではなく、「新しさ」（かつての草原生活にはなかった草原経営方式、かつてのモンゴル牛とは異なるホルスタイン牛の放牧など）を導入した創造的な「スルゲフ」であることが強調されており、この視点が第4章の「ウブルジェ」の創造的再建に大きな影響を与えている。

第3章では、前章のオリック移民村の研究成果を励みとして、筆者と若者グループがB移民村で開始した挑戦が描かれている。その挑戦には、当初、村長を初め大多数の住民が冷やかな視線を送るのみだったが、次第にアハラッガチ（遊牧・放牧の経験が豊かな長老）の支持も得、乳製品ステーションの設立にこぎつけることができた。このように、コミュニティ内部の活性化と並行して、マスコミを通じてB移民村の運動を発信する、大学生実習生を受け入れるなど、コミュニティ外部への能動的な規範の伝達も行われた。この点は、コミュニティ内部の新しい規範の形成と、その規範の外部への伝達が表裏一体の関係にあることを例証する貴重な事例である。

第4章では、予想もしなかった再度の強制移住という異例の事態に対する筆者らの対応が描かれている。B移民村、新規に設置された移民村、それ以外の地に地理的にも解体されたコミュニティは、まさに崩壊の危機に瀕していた。そのコミュニティ崩壊を繋ぎとめる唯一の糸と

して筆者が見出したものこそ、「ウブルジェ」という一つの言葉だった。それは、バラバラになった住民の原点とも言える、強制移住以前に生業を営んでいた草原を意味していた。彼らの原点である草原を、新しい制度を構築して自主管理すること、これが運動の大きな目標となった。「住民を動かす言葉を抽出する→その言葉を軸とする新しい運動を創出する」という本研究で取られた方略は、さまざまなコミュニティの活性化を考える上で重要な含意を有している。

本論文では、上記の実践を自省するために、規範理論による考察がなされている。しかし、その考察は、一応の解釈としては理解できるものの、本当に自省の役に立ったのか、さらには、運動を推進する有用な言説になっているのかという点では、必ずしも十分とはいえない。今後、実践そのものを深化させつつ、真に運動の駆動力となる理論的言説を渉猟、開拓していったほしい。ただし、このような理論的考察の不十分さはあるにしても、本研究で報告された筆者を中心とするコミュニティ再建の運動は、グループ・ダイナミックスの貴重な実践例であり、理論的考察の不十分さを補って余りある。

以上のように、本学位申請論文は、コミュニティの再生・活性化というグループ・ダイナミックスの重要なテーマに取り組んだ優れたアクションリサーチをまとめたものであり、共生人間学専攻人間社会論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって、本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成 24 年 1 月 13 日、論文内容とそれに関連した事項についての試問を行なった結果、合格と認めた。

Web での即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降